

世界医学への一步を踏み出すために

西本クリニック

西本隆

私が会頭をつとめました第4回学術総会の会頭講演では、「なにわの中医学」というテーマで、関西の地における中国伝統医学の輸入から現代までの道のりをお話しました。その中で、1970年代、日中国交回復を契機に現代中医学が日本に入ってきた際、それまでの日本漢方と新しい中医学を俯瞰的にとらえ、当時の若手医師達がそれぞれの方向性で中国伝統医学を目指すためのキーパーソンであった中島随象先生(1898-1985)を紹介しました。中島先生は一貫堂森道伯の一門でありましたが、流派にこだわらない独特の世界観により、伊藤良、山本巖、松本克彦らの多くの俊才を生み出したことでも知られています。その中島先生の言葉に、次のようなものがあります。

「東西両医学の接点にある日本人は、東西両医学を理解し、これを結合させ、人類に貢献できる最短距離にある」¹⁾

「世界的医学をつくり上げるには、まず、東洋医学をつくらなければならない」²⁾

我々は約半世紀前の老漢方医のこの言葉をもう一度噛みしめ、大きな目標を持って前に進む必要があると考えます。

では、具体的にはどうしたらよいのか。会員数の拡大、専門医制度の導入など、日本中医学会がやるべき課題は山積していますが、より、高みを目指すために、次のような提案をしたいと思います。

まずは、中国のみに限らず世界的に、中国伝統医学に関連した論文、報告を収集し、エビデンス及び歴史的意義、という観点から、今必要なもの、歴史的に有意義なものをチョイスし、それに対して、会員が自由にアクセスできるような体制を構築することが必要と考えます。そのためには、現代医学、中医学、語学に精通する人材を発掘し、支援することも必須でしょう。これは学会のレベルアップに直接つながる事であると確信しています。そして、今後は、基礎系（特に理学、薬学）の研究者との連携をこれまで以上に強固なものにしていくことが大事ではないかと考えます。このようにして、会の裾野を広げつつ、より高みを目指すことで、中医学会が本当の意味での東洋医学の柱になり、そして、中島先生の言葉にあるように、「世界的医学」への階段を登っていくことができるのではないのでしょうか。

¹⁻²⁾第29回日本東洋医学会学術総会(1978年)会頭講演記録より